
魔術学院の恋愛事情

香月航

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術学院の恋愛事情

【Zコード】

Z0530Z

【作者名】

香月航

【あらすじ】

とある魔術学院のとある平凡な私と、何故か非凡な彼と恋をしたりしなかつたりする…かもしれない話。

こちらは個人サイトで公開している作品の番外編になります。単体でもお楽しみ頂けるように書いて参りますが、詳しい世界観などは大元の作品を「J」確認下さいませ

〇〇・ある放課後の「こと」（前書き）

個人サイト作品の1周年記念？で書いて参ります、息抜き〇〇です。
ゆるーっと適当にお砂糖話をお楽しみ頂ければ幸いです。

〇〇・ある放課後の「」

オレンジ色の日差しが、見慣れた教室の天井を染め上げる。

昼と夜の間、世界の全てが赤になる「」の時間は、とても美しいと思う。

そう、例えそれが“視界を埋める大半”の背景に過ぎないとしても。

「？」を見ている？」

背筋に響く低く甘い声色に、投げかけた思考が連れ戻される。

整った輪郭を滑り落ちるのは、まるで刃のよつな輝く青銀。

対象的に、私の間抜け顔を映すキレ長の瞳は金色^{やっこいろ}。

彩られた内側には、すっと筋の通つた鼻と抜群の位置で引き結んだ唇。

あれだ、よーするに、すっぽり美形が

何故か私の超至近距離にいらっしゃいます。

「……」

両手首を捕まれ、背中は後ろの机に縫い付けられたように動かない。整ったお顔は吐息がかかるような距離で、今も刻一刻とその隙間を狭めつつある。

「…あの、先輩。聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

「なんで私、名前も知らない先輩に押し倒されているんでしょう？」

01・別世界で生きててくれよ

『魔術』と呼ばれる魔道技術を至上とする王国・ロスヴィータ。この国において、唯一の国立の学び舎であり、その道の最高峰の名門校がある。

才能のある者ならば出自を問わず、15歳から入学が可能。全寮制で、在学期間はどの私立学校よりも長い6年間。

それがこゝ、『ロスヴィータ王立魔術学院』

運よく才能を持つて生まれた私、メリル・フォースターは、運よくこの名門校に入学でき、今年で一年目になる。魔術師として特筆するような部分はないものの、クラスの友達とも寮の相方とも問題なく、日々平穏に暮らしている。

……暮らしていたのだ。

そう、平凡で何もない毎日を楽しく生きていたのだ。

(… はい現実逃避終了)

目を開けば、相変わらずタダに染まつた教室の一角。

至近距離には美形の先輩がいらっしゃる。

一体何がどうしてこうなってしまったのか。

とりあえず、私が投げかけた『知らない』と言つ事實に、先輩は整った形の眉をひそめている。

氣分を害したとしても仕方ない。知らないものは知らないのだから。

「…俺は六年のギルベルト・クラルヴァインだ。それなりに有名なつもりだったが、こんなものか」

「ああ、クラルヴァイン先輩。名前だけ聞いたことがあります、少し」

「そ、そうか」

眉間の皺を一本増やして、深く息をはぐ。

先輩、この距離でため息つかるとすゞしきりですマジやめて。

ともあれ、最上たる六年のクラルヴァイン先輩と言えば、確かに下級生でも聞く名前だ。

クラルヴァイン家は確か、子爵位を賜る貴族でありながら、魔術の名門としてもその名を連ねている。^{つまり}

加えて先輩本人のこの整いまくった容姿とくれば、有名じゃない方がおかしいだろ？

「私のように、なーんの興味も関係もない庶民がいるのも事実だけど。」

「それで、名門家の先輩が一平民の私に何の用でしょ？」

自分で言つのも何だが、私は本ッ当に平凡だ。

普通の家庭で生まれ、普通の娘として育てられ、学院に入れたものの成績は真ん中や下め。

容姿も先輩とは違い、礼賛の言葉には縁遠い。あと貧乳。

どう考へても先輩とは住む世界が違う。

こんな事態になつていては、まず何かの間違いとしか思えない。

「この体制から連想するようなことは、そういうはないのではないか？」

「寝技の練習ですか？」

「斬新な返しだな」

「あとはすつしに田が悪くて、誰かと間違えたとか？」

「あいにくと、視力が下がった覚えはないな。メリル・フォースタ

「一

……残念ながら、呼ばれているのは私の名前だ。
同姓同名の美少女がいると言つ噂も聞いたことはない。

「……お前で呼んでも構わないか？」

「……」

左手の拘束が解かれて、離れた流れのままに指先が頬にふれる。

「すぐすぐつたいです

「じきに慣れる」

ゆっくりと輪郭を滑りおりて、顎の辺りで一度止まる。

軽く上を向かされれば、もう影の重なるような位置にじく顔がある。

視界を埋める男性の姿は、びっくりするほどきれいだ。

赤い日差しが濃い影を落として、より一層整った輪郭を際立たせる。このまま絵画として切り抜いて飾つてしまえるぐらいに。

……なぜかときめきは沸いてこない。

(……瞳に、熱がない)

この上なく近くにいるのに、『観察されてる』とでも言つのだらうか。

ますます美しい色を魅せる金眼は、何の感情も映さずじりじり見ていくる。

「…珍しこ反応をするな」

「やつですか?」

「俺がこの距離までせまつて、無表情を通す女は初めてだ」

「貴方この、色事を構えるような表情ではありますよ」

瞬間、初めて先輩の顔に表情らしい表情が浮かんだ。

わよとん、と。音がしきりにぐらごの、ひよつと間の抜けた驚きが。

「…そんなこと、初めて言われたな」

「いつもの無表情顔で女性にせまつてたんですか。割とひどいですね」

「そんなに酷い顔をしていたのか」

すっと、予想よりもアッサリ拘束が外れる。

大きな影がどいて、開けた視界に鮮やかな夕日がしみた。
いつの間にか紫が混じり始めたそれは、もう間もなく暮れてしまうだろう。

予想以上に時間が経っていたみたいだ。
そろそろ学院を出ないといけないのだけど…

「あの、先輩？」

人の世界を遮断していた男は、何やら少し落ち込んでいる様子だ。
…立つてみると、私よりも頭ひとつ以上背が高い。
腰から下の長さは、もはや嫌味の領域だわ。

「先輩、用事がないのなら私は帰つてもよろしいですか？」

だから、口調に少々トゲがはえてしまつのも、ご容赦頂きたい。
家柄がよくて顔がよくて、おまけにスタイルも抜群とか。どこまで
天にえこひいきされているのだか。

「ああ、悪い。用件を伝えていなかつたな」

「…出来れば口頭で伝えて頂きたかつたですよ」

しかも、先ほどまで初見の女を押し倒していたと言うの。全く平然と。全く、何事もなかつたかのように立っているのが、また腹立たしい。

……私はこの17年の生の中で、あんなことをされたのは初めてだつたのに。

「それで、何のご用事だつたんですか？」

色んなことが重なつて、胸がムカムカしていた。

私はとにかく早く帰りたかった。

住む世界が違うすぎる彼と、これ以上同じ部屋にいたくなかった。

……今になつて思う。

あの時、用件を聞かずにそのまま逃げてしまつていたら、結末は変

わっていたのだろうかと。

「では、単刀直入に。
メリル・フォースター、俺の子供を生んでくれ

「…………は？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0530z/>

魔術学院の恋愛事情

2011年12月1日23時47分発行